ダルマキールティの大悲論
――論じ残されたことども――

木　村　俊　彦
（四天王寺国際仏教大学）

序

既に発表した通りダルマキールティ（c. 550-620）は主著『プラマーナ・ヴァールッティカ』第二章（宗教論と解脱論）において，ディグナーガの主著『プラマーナサムッチャヤ』の序詞を評釈して，自己の仏教学を披瀝していた。この章名 ‘Pramâṇasiddhi’ が実は論理的な弁証ではなく，「認識所依の定立」であって，フランコ教授の理解と違い ‘cause’ でもあり，‘reason’ でもあった。証明という誤解は第34偈の句 “sâdhanaṃ karuṇâ” にある。今にして思えば Eli Franco 教授（現・ライプチッヒ大学）も筆者の学位取得の年（「ダルマキールティにおける認識と宗教的権威――インド哲学諸派との対論を通して――」1997）にウィーンから ‘Dharmakîrti on Compassion and Rebirth’ を出版されて，帰敬偈と筆者の旧分類で言うプラマーナシッディ章の第４節の部分のみをプラジュニャーカラグプタの疏と共に訳して論じておられたので，この大会の機会に比較検討したい。但し旧分類といってもプラマーナシッディ章のみ取り上げる場合は有効であることは言うまでもない。学位論文では認識論，言語論，宗教論，実践論の中に配置して第一章と共に扱ったから，上梓本『ダルマキールティにおける哲学と宗教』に見る体裁にしたもので，新分類というわけではない。

序論の年代論は旧著と違い筆者が論考したものである（T. Kimura, A New Chronology of Dharmakîrti, *Dharmakîrti's Thought and Its Impact on Indian and Tibetan Philosophy,* Wien 1999）。

ダルマキールティの大悲論

周知の如く第二章はディグナーガの主著の序詞「認識所依たる方，世の利を願う方，教師，善逝，救済者に礼拝して，認識所依定立の為に，散在せる自論の集成をここに為すであろう」を評釈する形式である。それにはディグナーガの自註が踏まえられる。「ここにて，世尊の因果円満の故に認識所依として生まれた方（pramâṇabhûtaḥ）として讃頌が述べられる。敬信を生ぜんが為なり。そのうち因とは意志と実践（prayogaḥ）の円満であり，意志（âçayaḥ）とは世の利を願うこと（jagaddhitaishî），実践とは衆生を教誨する故に教師（çâstâ）たることである。果とは自利利他円満のことで，自利円満とは善逝として三義をとり，スルーパ王の如く称賛されること，熱病の完治せる如く不退転なること，満杯の瓶の如く無余なることである。この三義は，外道の離欲者と有学と無学（阿羅漢）なる者達から自利円満なるを差別化せんが為である。利他円満とは（衆生）済度の為の救済者（tâyî）たることである。このような徳を持つ教師に礼拝して」（Pramâṇasamuccayavṛtti, Derge-ed. 14b, 2-5）を踏まえている。このディグナーガの信仰告白が仏伝文学のジャンルからきていることは，『佛説妙色王因縁經』（大正蔵 No. 163）からも判る。「認識所依たる方」（Pramâṇa-bhûtaḥ）は『ラリタヴィスタラ』から，「スルーパ王」は『マハーヴァスツ』と『アヴァダーナシャタカ』からとされ（Hattori），「自利利他」はマイトレーヤの『瑜伽師地論』菩薩地の第三章がそのテーマになっている

(Svaparârthapaṭalam)。それも仏伝文学からきたものの如く，マイトレーヤは特に定義を述べていない。またそれは当然菩薩に関することであるが，仏伝的観念からは仏の徳に繋がる。ディグナーガの叙述では果行格に自利利他円満を配置している。この言葉は「自利利他の行の円満の故に」(âtmaparahitapratipattisaṃpadâ) 仏を讃え礼拝するとして，ヴァスバンドゥがはじめ『アビダルマコーシャ疏』の初頭に次のように述べたものである。

「論書を造らんとする者は，自己の教師（çâstâ）の偉大さを識らしめんと欲して，彼の徳を述べることから始まる敬礼を行なう。yaḥ 云々と。仏世尊に関して，彼が闇を壊した方だから〈闇を壊した方〉(hatândhakâraḥ) と言う。あらゆる仕方であらゆるものにおける闇を壊した方だから 'sarvathâ sarvahatândhakâraḥ' である。なぜなら無知は真実義の開示に碍たげとなるから〈闇〉と言う。そして仏世尊にはかの絶対の補集合（般若）があり，あらゆる仕方であらゆる対象に対して（知の闇が）再起しない本性になっているから，〈壊した方〉と言う。だからかの方は〈あらゆる仕方であらゆるものにおける闇を壊した方〉である。（中略）

それゆえ自利行の円満なる方として（svârthasaṃpattisaṃpadâ）の賛歎を了えて，またかの仏世尊を利他行のゆえに賛歎する。〈輪廻の泥から世人を引き抜き給える〉と。なぜなら輪廻は世人の引きずり込まれる所，また上に出られない所だから，泥（paṅkaḥ）の様なものである。そこに沈める世人を救わんと哀れむ世尊は，正法の教示という手を差し伸べて，それぞれをできるだけ引き上げられた。だからこの様に〈自利利他の行の円満なる彼に敬礼して〉，つまり頭を付けて（と言った）。如実・不顚倒なる事を教示する方であるから，〈真理の教師〉(yathârthaçâstâ) である。これによって利他行の方便が彼に顕現する。真理の教示によって彼は〈教

師〉であるから〈輪廻の泥から世人を引き抜き給える〉（saṃsârapaṅkâjja-gad ujjahâra）のであって，神通や恩寵の威力によって（引き抜き給えるの）ではない。」（Pradhan, p. 1）

「教師」（çâstā）という言葉もヴァスバンドゥが始めに疏で使っているが，こちらは果行格たる仏に対してである。「このように自利利他円満に具せる彼に礼拝して」（ya evam âtmaparahitasaṃpadâ yuktas tasmai namaskṛtya）と言う。これに対してディグナーガは菩薩の願たる慈悲を因行格に配置し，「世の利を願う方」（jagaddhitaishî）とした。ダルマキールティはそれを更に「慈悲」（karuṇâ, dayâ）とした。慈悲は因行であり，利他行たる救済は果行になる。しかもそれら四箇の徳は順・逆に成立すると見ている。

次に「公準たる方」（pramâṇabhûtaḥ）という持業釈（Macdonell, §188, c）とは，「完全な直観と論理の体現者」とダルマキールティに定義されている。フランコ教授はニヤーヤ派の「聖人」（âptaḥ）にも整合するように描いているとされたが（p. 29），しかしダルマキールティが親しんだ『ニヤーヤバーシュヤ』では，「聖人」とはアプサラス等知覚不可能なものを告知する人と定義し（ad Ns. II, 1, 53），ディグナーガの，「聖人の言葉は推論同様に整合性（avisaṃvâdanam）を持っているから推知に含める」とした『プラマーナサムッチャヤ』II, 5 と明らかに異なる。

さて「因果円満の故に」という具格は「認識所依たる方」の理由であるが，後の四箇の徳称はヴィブーティチャンドラの言うように，順・逆に（anulomapratilomataḥ）相互の理由とされている（Sâṅkṛtyâyana, p. 521）。かくて第一の「慈悲者」からも第四の「救済者」からも「認識所依たる方」が定立できる。この「定立」（siddhiḥ＝sâdhanam）は成立する謂ではあるが，推論的なものではない。フランコ教授は第一章で，四者と認識所

依性の関係を，因果関係か弁証理由かの可能性について７図も使って図示しておられるが，本偈を素直に読めば如上の解釈になる。四徳と公準との関係は因果関係と理由の両方で解釈されるが，菩薩から仏への道筋を考えると，勿論因果関係である。ダルマキールティの口ぶりは，奪格で理由と原因を兼ねている。それは論理的な弁証ではないので，「定立」と解釈した。フランコ教授は “sâdhanaṃ karuṇâ” を “Compassion is the proof of the Buddha being a means of knowledge.” と訳され，“karuṇābhyāsāt” という複合語にはしない読み方を諸註に見ておられる。教授の本文は，我々の分類で言う第四節にあたる部分だけ（Pvk. II, 34-72）を，特にプラジュニャーカラグプタの疏を訳しながら解釈するプロットであるが，我々は諸註釈の解説を参照しながら本偈の第一章の認識論と言語論および第二章の宗教論と実践論を複合的に解釈してダルマキールティの仏教哲学をインド哲学の中で浮き出させるものなので，こういった解釈は自明のものとして，心相続の定立の方に目を向けている。旧著では「証明するものは慈悲である」としたが，学位論文では「定立するものは慈悲である」とした（p. 189）。

もともとディグナーガは “pramâṇasiddhyai” として認識根拠の定立を宣言しているので，ダルマキールティもここでは仏の認識所依性の定立でよく，“sâdhanam” は従って「定立するもの」である。即ち，ここでは讃仏乗的な序詞の評釈である為，ダルマキールティ得意の推論的弁証は為し得ず，それはニヤーヤ派の神の証明の批判に対してのみ行使された。「定立」はドイツ語の ‘Aufstellung’ の訳語で，ヘーゲル哲学では否定的な響きさえ持っているが，論理的にではなく哲学的に組み立てていく謂である。英訳は ‘establishment’ で，サンスクリット題字の ‘siddhiḥ’ は「定立」で良い。認識所依たることは仏の大悲からくるとの謂である。しかしそれは

フランコ教授の言葉を借りれば，具格は理由（reason）と原因（cause）を兼ねている。分けることは難しい。

さて次の“abhyâsât sâ”は，「修習から大悲が判る」ということで，根拠を意味している。弁証句にとると，菩薩の類を見ない徳性は自性因になじまない。譬喩を立てられないものなので，「大悲」と差別化される。マノーラタナンディンは，「或る菩薩大士は慈悲の権化として発奮して，衆生が集と苦を捨て道と苦滅を得るべく教えんと欲される」とし（Sâṅkṛtyâyana, p. 21），それが多劫に渉ったことを示唆している。ダルマキールティが慈悲の根拠を多劫に渉る修習とした所以である。そして教師たることは因行格に配置されている。作因と証因（cause と reason）をあわせ持たせることで奪格とした。フランコ教授とわれわれはここで解釈が異なるのである。多劫に渉る修習には輪廻の保証が欠かせない。そこで，心が身体に対してヘゲモニーを持つ議論を展開するのである。経量部的色身互薫説（k. 42）を踏まえる所もあり，しかもヴァスバンドゥ的に識蘊が輪廻の主体と考えていた。「或る」とは単独の要素であることを意味し，論理に乗らないことが理解される。

所でプラマーナシッディ章の構成は既に「量評釈・フラマーナシッディ章の宗教論と解脱論」（『印度學佛教學研究』第20巻 1 号，1971）で提示したように，前半の宗教論と後半の解脱論から成る。更に広く仏教学の視野を拡大すると，後半の，我見を諸悪の根源とするダルマキールティの実践論はスティラマティの『唯識三十論釈』が先駆けとなっている事を理解する。彼は「すべての慢心は実に有身見に依って起る」と註釈しているのである（mâno hi nâma sarva eva satkâryadṛshṭisamâçrayeṇa pravartate / Lévi, p. 28, 28-29）。ヴァラビーの碑文に出てくるスティラマティを 6 世紀後半とする研究者が居たが（『印佛研究』にあったが，今検索し得ない），カルナー

タ国出身らしきダルマキールティが北方の彼に学んだ可能性も出てくる。俱舎・唯識に通じていたスティラマティはダルマキールティの師としてふさわしい。「カルナータ女の白い歯よりも名声が欲しい」という彼の詩は小著 p. 48 参照。

ダルマキールティとパーリ聖典

『プラマーナ・ヴァールッティカ』宗教章の最後で再び世尊の公準性（prâmâṇyam）を総括する。「公準」の訳語は西洋論理では Postulat のもので，証明不可能な実践上の公理とされている（カント）。ここでは認識所依たることで，まさにダルマキールティが根拠を論じた所である。ここで興味深いことは，ダルマキールティも証明ではなく実践上の根拠を論じた仏陀論を ‘Pramâṇasiddhi’ と為した。「インドのカント」（Ф. И. Щербатской）の面目躍如である。救済者（tâyî）⇄善逝（sugataḥ）⇄教師（çâstâ）⇄悲願者（jagaddhitaishî）は相互に原因となりながら世尊の公準性の原因になり理由になる。その奪格や ‘sādhanam’ は cause と reason を兼ね具えているうまい表現だ。

しかしまたブッダは文字通り完全な知覚と推理・推論の体現者でもあって「公準たる方」の徳称があるとし，知覚は四諦の現観，推理・推論はパーリ律大品の初転法輪での比丘の応答語（禅の投機の偈の様なもの）を以って完全性を示したとする。実は弟子の語であるが，仏典という事だろうか。「生起の性質を持つものはすべて滅尽の性質を持つ」（yaṃ kiñci samudaya-dhammaṃ sabbaṃ taṃ nirodhadhammaṃ / Vinaya, Mahâvagga, p. 11, 35-36）というもので，他部派の初転法輪の記述ではこれが無いか四諦の現観に置き換えられている。ダルマキールティはこの他にも縁起の公理の前置

き，「かれ有ればこれ有り，かれ生ずるによりてこれ生ず，かれなくしてこれ無し，かれ滅するによりてこれ滅す」を示唆して（k. 49），パーリ相応部（imasmin satîdaṃ hotîmassuppâdâ idam uppajjatîmasmin asatîdaṃ na hotîmassa nirodhâ idaṃ nirujjhati / Saṃyutta-Nikâya, Vol II, p. 65, 5-7）によく合う。これは十二支縁起の preamble で，12の要素を函数的表現に置き換えたものである。ナーガールジュナもここの件りを『中論』Ⅰ, 10 で引いて検討している（satîdam asmin bhvatîty etannaivopapadyate）。所で彼はパーリ聖典を見ていたのであろうか？

然りであると共に，それはダルマキールティがパーリ聖典を見ていた問題にも関連する。つまりナーガールジュナがパーリ聖典を sanskritize したことを証明すれば，ダルマキールティも同様のことがあることが考えられるという example になる。それは『中論』XIII, 1 の件りである。

宇井博士が『東洋の論理』の「空の論理と形式論理学」中で「完全な三段論法になって居て，間然する所がない」と引用されているのが，「妄取法である所のものは凡て虚妄であると薄伽梵は説かれた，然るに一切の諸行は皆妄取法である，故に悉くが虚妄である」と訳される件り（tanmṛshâ moshadharma yad bhagavân ity abhâshaṭa / sarve ca mosha-dharmâṇaḥ saṃskâras tena te mṛshâ//）だ。しかし「妄取法」と訳された ‘mosha-dharmâṇaḥ’ はそれでは意味が通じない。これは『スッタニパータ』第757句後半，“taṃ hi tassa musâ hoti mosadhamman ittaraṃ” を，ナーガールジュナが機械的に，“tanmṛshâ moshadharma yad bhagavân ity abhâshaṭa” と sanskritize したものだ。しかし乍ら ‘moshaḥ’ には「奪う者，奪われた物」以外の意味はない。R. オットーは ‘Mystik’（神秘主義）の ‘mys’ をサンスクリット語 ‘moshaḥ’ の語根√mush（隠す）と関連付けたものである（Das Heilige, p. 30）。

このままでは文意が通らない。ナーガールジュナは『スッタニパータ』No. 757 の通り，「虚妄な性質のものは偽りではかない」という文意のつもりだったと解釈せざるを得ない。つまりナーガールジュナは下手な sanskritization を見せたのである。村上・及川訳（『ブッダのことば註』）は，「どのように考えてもそれとは別のものになる。なぜなら彼のそれは偽りであり，はかない虚妄の法だからだ」ということになる。「偽りの法あるものははかない（ittaram） 虚妄の法あるものだ」という命題がナーガールジュナの大前提になって，かく一切のものは虚妄の法である，故にはかない，つまり無自性＝ 空の帰結に辿り着く。中村博士の『ブッダのことば』における和訳「過ぎ去るものは虚妄なものであるから」という訳は命題の主語と述語を顚倒している（『ブッダのことば』p. 170）。『佛書解説大辞典・増補II』（1975）で私はこの訳書の紹介記事を書かせて頂いたが，今般漸く瑕疵を一箇所指摘させて頂くことができた。「妄取法」云々という宇井博士の訳も勿論意味不明になっている。

『スッタニパータ』大品のここの件りは，無我を有我と錯まって執着してもそれは別のものに（aññathâ）なってしまうというもので，それははかなく（ittaram）間違っているというのである。ナーガールジュナの用法は単に同語反復の詭弁になっている。彼は説一切有部の教説を取り上げたが，面白いことに心相続（cittasantânaḥ）の理論を不断不常という空観的理念から肯定的に止揚している所がある（XVII, 9-10）。そこは業という種子と果報の輪廻の関係を不断不常という空観的理念から説明する所である。

「その心から心相続が生じ，それから果報が生まれる。その（相続は）心なくしては生まれない。」「そして心から相続があり，又相続から果報が生まれる。業を先として果報があるから，それは断でもなく常でもない。」

パーリ相応部の「因縁相応」でも，業によってわが身という果報があり，だから「汝のからだではない」（na tunhâ）と言うのである。我見が諸悪の根源であることはヴァスバンドゥが『アビダルマコーシャ』の付録で犢子部の ’pudgala’説批判で展開しているが，マイトレーヤも無常な諸法に対して〈我〉を付託すると『瑜伽師地論』で述べ（p. 135f.），スティラマティも『唯識三十頌釈』で有身見を根源とし，今又ダルマキールティは実践論で，四つの聖原理を有我と無我から展開して見せたのである。

結　　論

四諦の説示こそが仏智と大悲の象徴であるとしたのはダルマキールティ自身の構成であるが，フランコ教授は徳の相互関係に関心を持っておられた。因―果は，元より cause の関係であるが，ダルマキールティが，修習（abhyâsa）から大悲が判るとしたのは認識根拠の関係であり，大悲（karuṇâ）から救済の実践に到るのは cause の関係になる。sâdhanam は根拠の意味ばかりではなく成立因をも意味している。ダルマキールティの理論は証明の問題ではなく理解の根拠を問うものであった。越格の特異点（要素）には分析判断（遍充に依る）は成立しない。

次に，ディグナーガに依る大悲を含む徳の構成と敬礼の言葉の由来をヴァスバンドゥの倶舎論疏に見つけることができた。これは不思議なことに今までの研究者が一度も見ていない。更にダルマキールティの阿含經典引用が結局パーリ聖典のものからであったことはナーガールジュナの場合と同様であることから，あり得たことと推測できた。その考証の為に『中論』の例を見た。「悲」は四無量心の一でもあるが本稿でパーリ聖典との関係に決択を著けた。尚，「大悲」（mahâkṛpâ）という語は四種の修習を

表わすものとして『アビダルマコーシャ』Ⅶ, 33の疏でヴァスバンドゥが言っており，またその疏で「因円満・果円満」も言っている。

付　記

『印度學佛教學研究』第五十四巻二号の「『方便心論』の論理と立場」の註 2（562頁）の中で「四十四年」とありましたのは「四一四年」の誤植です。H. Kulke, A History of India, 2000, p. 91 で，ヴィクラマーディトヤII＝ チャンドラグプタ二世の退位・寂年を「A.D.413/415」とありますので，彼の外護を受けたヴァスバンドゥの死亡年は，直観的宇井説の通り，およそ西暦400 年頃になります。

『ダルマキールティにおける哲学と宗教』補正表

（お詫びして下線部の如く訂正します）

頁	行	補正内容	頁	行	補正内容
41	8	その子を破った…王が	42	8	冒頭でダルマパーラを
111	9	文法学派の	121	3	顕現順序でも
173	6	unmukhatâ	174	17	カルマダーラヤ複合詞
177	29	所作性も	205	26	我見
222	14	yuktyaga-	245	10	原因がある
263	25	後者がある	337	27	ヴァスバンドゥが引用する

使用文献目録（使用順）

Eli Franco, Dharmakîrti on Compassion and Rebirth, Wien 1997.

Pramâṇavârttika by Âcârya Dharmakîrti, edited by Râhula Sâṅkṛtyâyana (The Journal of the Bihar and Orissa Research Society, Vol. 24, Pts. 1-2) Patna 1938.*

木村『ダルマキールティにおける哲学と宗教』(1998)，同『ダルマキールティ宗教哲学の原典研究』(1981)。

Masaaki Hattori, Dignâga, on Perception, Cambridge Massachusetts 1968.
Abhidharmakoçabhâshya of Vasubandhu, edited by Prahrad Pradhan, Patna 1967.
Arthur A. Macdonell, A Sanskrit Grammar for Students, Oxford 1927.
The Nyāyadarçana, edited by Gaṅganâtha Jhâ and Dhundhirâja Shâstri, Benares 1925.
Vibhûticandra, Pariçishṭam of Manorathanandivṛtti, ed. by R. Sâṅkṛtyāyana (JBORS. Vol. 26, Pt. 3) Patna 1940**.
Triṃçikâ Vijñaptimâtratâsiddhi, ed. by Sylvin Lévi, Paris 1925 (Reprint).
Dignâga, Pramâṇasamuccayavṛtti, チベット語訳，東北帝國大學藏版西藏大藏經總目録（仙台　昭和九年）第4203***。
Saṃyutta Nikâya, Pt. III, ed. by M. L. Feer, London 1970.
Mûlamadhyamakakârikâs de Nâgârjuna, publié par Louis de la Vallée Poussin, Saint-Petersbourg 1904.
The Sutta Nipâta, ed. by D. Andersen and H. Smith, London 1984.
宇井伯壽『東洋の論理』，東京　1960。
中村　元『ブッダのことば――スッタニパータ』，東京　2002。
村上真完・及川真介『仏のことば註』（三），東京　1988。
外薗幸一『ラリタヴィスタラの研究　上巻』，東京　1994。多劫に渉る菩薩の慈悲の修習がこの書の775頁に訳されている。
The Yogâcârabhûmi, edited by Vidhushekhara Bhattacharya, Calcutta 1957.

＊は東北大学図書館のものを磯田先生に，＊＊ は京大図書館のものを宇野先生に，＊＊＊ は東北大学図書館のマイクロフィッシュ版を職員の方に，それぞれお世話になりました。敦くお礼申し上げます。

又，昨年はフランコ・プライゼンダンツ両教授御夫妻の御宅にて我々が暖いおもてなしを受け，篤く御礼申し上げます。